

Title	伝統的な言語文化を未来へと継承する姿勢を育てる「和歌」の指導
Author(s)	國井, 聡史
Citation	国語論集, 15: 144-151
Issue Date	2018-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9749
Rights	

伝統的な言語文化を未来へと継承する姿勢を育てる「和歌」の指導

國井 聡史

はじめに

平成三十三年度に全面実施される新学習指導要領における国語科の学習内容の内、「我が国の言語文化に関わつては、平成二十八年十二月の中央教育審議会答申において、「引き続き、我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視する必要がある。」とされている。

「言語文化を継承・発展させる態度」とは、先人の遺産である伝統的な言語文化を、敬意をもって学び、またその学びの成果を次の世代へと伝えていく担い手としての意識を、学習者一人一人がもつことであると捉える。残された遺産を正しく受け継ぎ、よりよい形にして、また次の世代へと渡してゆく学びの力こそ、新たな価値を生み出す人材の育成に必要な資質・能力であると考ええる。

そこで、「伝統的な言語文化の豊かさを感じる学びを通して、未来へと継承する姿勢を育てる授業の創造」という主題を掲げ、平成二十八年年度より授業研究を行ってきた。小中九年間を通して、言語文化の豊かさを感じ取り、古典の世界に親しみ、獲得した言葉を自覚的に言語運用する姿を最終的な目標と捉え、児童生徒が古典の世界に自分事として探究心をもつて向き合うことが、できるような授業を構築する必要があると考えた。

小学校の先生方とも共同で研究を行ってきたが、現行の学習指導要領における「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の指導に当たっては、「同じ教材を発達段階に応じて異なる切り口で授業を展開する」という

ことが重要であり、それぞれの学年に応じ、系統的に言語活動を設定することにより、小中九年間を通して伝統的な言語文化を未来へと継承する姿勢が育まれるものと考えた。

本論文は、小中九年間のゴールとも言える中学校三年生の「和歌」の指導実践を報告するものである。

一、授業の構想

「伝統的な言語文化を未来へと継承することの具体について考えたときに、新海誠監督の映画君の名は。」が想起された。この映画は、平成二十八年八月に公開され、日本国内における興行収入二五〇億円超を記録した長編アニメーション映画であるが、ストーリー設定には、二つの古典作品（小野小町の和歌「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを」／「とりかへばや物語」）が取り込まれている。また、新海誠監督の「君の名は。」の前の作品である「言の葉の庭」には、劇中に柿本人麻呂の和歌（鳴る神の少し響みて 差し曇り雨も降らぬか 君を留めむ）／「鳴る神の少し響みて 降らずとも我は留まらん 妹し留めば」が登場し、物語の展開にも大きく関与したのとなっている。

このことを知り、「和歌や古典から生徒たちなりに世界を広げられれば」と考えたことから、単元名を「和歌に描かれた世界を広げよう。」とし、指導事項①「古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと」から、言語活動を「自分が選んだ和歌を小説と翻案する（書き換える）」と設定した。なお、「書くこと」の領域との複合単元と位置付け

た。

用いた教材は、現行の教育出版教科用図書「伝えろ言葉 中学国語3」の『和歌の調べ』である。ここには『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の三大歌集に収録されている和歌が十四首掲載されている。これらを学習することで、古人に思いを馳せ、和歌という文学の源に触れることのできる教材である。また和歌は、その性質上、古典に関する技法や特有のリズムを学び、詠んだ歌人たちの考え方や心情を捉えやすく、同時に様々な解釈も生まれやすい教材と考えられる。そのため、文字として表現されたものの奥にある世界について生徒一人ひとりが様々な思いを巡らせ、そうした思いを自分の言葉で表現しながら学習を進めることに適していた。

次いで、生徒がこれまでに体験してきた活動、身につけてきた言葉の力について触れる。二学年時には、『枕草子』『徒然草』を題材として、古人になりきって随筆を書く」という活動を行っている。この活動を通して、生徒は、古人の遺した多くの文章を読むことによって、古人のものの見方や考え方に触れ、古人の人物像を捉える力を身に付けてきた。また、「書くこと」の領域においても、二学年時に「写真から物語を想像し、描写に注意しながら小説を書く活動」を行い、限られた情報の中から想像力を働かせて物語を創造し、効果的に描写を用いて書く力を身に付けてきた。

このような生徒の実態から、本単元においては、自分で選んだ和歌を短編小説に書き換える」という言語活動を体験しながら、大意・歴史的背景・表現技法などといった和歌の内容について学習することを通して、和歌の背景にはどのような世界の裾りがあり、どのような意図をもて限られた音数にまとめられたかを考え、自分が解釈した世界観を自分の言葉で描写に注意しながら表現することで、古典における短詩型文学作品の「行間を読む」姿を自指すこととした。

二、授業の実際

単元の途中で間をおき、小説を実際に書く時間を「宿題」として授業外

に設定したが、授業そのものは全七時間で実践を行った。

【一時間目】

まず、新海誠監督の「言葉の庭」君の名は。について紹介した上で一部を視聴し、そこで用いられていた和歌と、和歌から拵がった作品の世界観についての確認を行い、単元の課題を提示し、学習計画について確認した。その後、三大歌集についての知識を学習しつつ、それぞれの内容の特徴等にも触れ、この時間は終了した。

【二・三時間目】

教科書に掲載の和歌十四首の内容把握を行った。具体的には、それぞれの和歌の大意（表現）技法、句切れ、中心となる歌人の思いを確認していた。二時間かけて進めていったが、一時間目には万葉集の八首、二時間目には古今和歌集の二首と新古今和歌集の三首を区切れよく扱うことができた。内容把握を行う上で、「この和歌の世界観を現代の小説に書き換える」というような内容になるか？」など、イメージを膨らませ、先の活動に向けて見通しを持てるよう、対話を重ねた。

【四時間目】

十四首の和歌を教師側でA・B二つのグループ（Aは人の心を詠んだもの、Bは自然や風景について詠んだもの）に分け、その分け方の意味について考える活動を行った。当初は、交流も含めての活動に二十分程度割く予定であったが、個人思考の段階ほとんど全体的に生徒が解答を導き出していたため、交流の時間をとらずに次の活動へと移った。

次に行った活動は、それぞれのグループの和歌を小説化する上でのメリット・デメリットについての考察である。生徒たちのこれまでの読書経験から、「自分これまで読んできた小説に近い」「小説化しやすい」と感じるものはAのグループ（人の心を詠んだもの）の和歌であったが、逆に人のグループの小説化の上ではほとんどデメリットがあるのか、また、Bのグループの和歌の小説化にはほとんどデメリット・デメリットがあるのか、個人思考を行った後、グループ交流、全体交流の流れで深めていった。そこで生徒から出た意見は次の通りである。

○Aのメリット

- ・人物を決めやすい
- ・ストーリーを決めやすい
- ・書きやすい(想像しやすい)
- ・叙述に幅ができる
- ・共感を得やすい

●Aのデメリット

- ・物語が広がりにくい
- ・ありきたりになる(発想が固まりやすい)
- ・構成をよく考えなければならぬ

○Bのメリット

- ・様々な広がりが出て面白い
- ・一から考えられる
- ・歌人の思いを反映しやすい
- Bのデメリット
- ・感情の共感得にくい
- ・景色のみで物語を作りにくい
- ・人物、ストーリーが決まりにくい
- ・読み手が想像しにくい

また、この時間には、実際に小説を書くにあたって設定すべき基本事項(登場人物、時代、場所、事件、出来事、あらすじ)についての確認も行い、次時のイメージを持たせた。

【五時間目】

この時間は、自分で選んだ和歌をオリジナル小説に書き換えるために、基本設定を行った。初めに、教師が「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(在原業平・教科書)には非掲載を基にして作成した小説の基本設

定の例を提示した。その後、個人で自分が選んだ和歌を基に、小説の基本設定を行った。前時で確認した基本事項に沿う形となったが、「あらすじ」の部分については四場面構成でプロットを組み立てる」という条件の下、行つた。想定していたよりも設定に時間がかかつてしまったが、授業の後半には交流を行つた。交流の視点としては、「どの和歌がもとになった小説か」「その作品を完成させていく上で作者のアドバイスを持つよう指示をした。

【六・七時間目】

前時で交流した内容を踏まえ、六時間目はそれぞれ設定を練り直す、あるいは小説を書く時間としたが、全ての生徒がこの時間内に小説を書き終わらなかつたため、授業は次時から次の単元に進むことを告げ、長期に渡つての宿題とした。与えた期間は一か月余りで、手書きの原稿用紙の提出ある、はコピー・タタ室の共有フォルダ内に文書データの保存のいずれかを選択できるようにした。字數制限は上限も下限も設けなかつた。提出期限後に再度の単元の授業を一時間行い、全体交流を行うことを予告した。完成した小説を一篇、生徒が作成した原文のまま掲載する。

①「人はいさ心も知らずさるさと花を昔の香にほひける」(紀貫之)

「俺たちずつと親友だよな」

最後に拓斗と話したのは、中一の春。あの桜がきれいに咲いた日。いつものように拓斗と桜ヶ丘公園に来ていた。

—— 一年前

俺の名前はまさや。桜ヶ丘中学校一年生。親の転勤で引越してきて、桜ヶ丘中学校には知らない人ばかりだった。中学生になつたばかりの俺には不安しかなかつたが、そんなときに拓斗が話しかけてきてくれた。

「俺、拓斗。よろしく。」

「俺はまよや…。」

それが拓斗と俺の出会ひだった。それから、とても仲良くなつた。家の方向がたまに同じで、いつも一緒に帰つた。家の帰り道に桜ヶ丘公園という公園があつた。そこには、大きな一本の木が生えていて、拓斗がその木の下で「これからここに来ようぜ。高校生になつても！」

「いいね。」

と、約束した。それから、学校の帰りにはいつも公園に行つていた。

夏、部活帰り、うるさい蝉の声を聞きながらコンビニで買ったアイスを食べたり、秋、木や自然の紅葉を感じながら学校の宿題をしたり、冬、マフラーと手袋をして、温かい飲み物を飲んだり、一年でたくさん思い出が出来た。

あの約束を忘れたことに春はおどすれた。

始業式が終わつて拓斗と帰ろうとしたとき、拓斗に

「桜ヶ丘公園行こうぜ。」

と誘われた。はしめから行くつもりだったが、拓斗が誘つたことに違和感があつた。

桜ヶ丘公園について、いつものように木の下に座る。上を見上げると、桜がとてもきれいに咲いていた。

「きれいだな。」

「うん。」

それからいつも通りの会話をして、そろそろ帰る時間になつたが、拓斗は帰らなかつた。

「まだ、もう少ししようぜ…。」

いつもと違う拓斗を見た俺は、なぜかこんなことを聞いていた。

「俺たちずっと親友だよな。」

拓斗からは返事が返つてこない。だが、俺は続けた。

「高校になつてもここに帰つて、約束したよな。」

「…。」

そのあと、何時間が沈黙した。

するて

「まよや、あのな、俺…、転校する事になつたんだ。約束守れなくてごめん…。」

あまりにも突然すぎて言葉が出なかつた。聞きたいと、言いたいと、たくさんあつたはずなのに、何もできなかった。

気づいた時にはあたりは真っ暗で、拓斗の姿はなかつた。拓斗は先に帰ると言つていた気がしたが、覚えていない。

「自分は一人で公園に行き、一人で遅くまで桜を見ていたのではないか。」とか考へて、まよやさんの出来事をなかつたことにした。けれど次の日学校に行くことになつた。朝の由で先生から

「拓斗君は今年の夏に、転校することになりました。みんな拓斗君との残りの時間を大切に。」

先生の話なんて頭に入つてこない。「嘘じゃなかつたか。」

田舎が終わつてから、拓斗はクラスみんなに「どこに行くの？」とか「どうして転校するの？」とかいろいろ聞かれていた。だが俺は拓斗に話しかけることができなかった。それが何日も続いたから、気まずくなく、拓斗を避けるようになった。

「まよや、あのな…。」拓斗から話しかけられても無視をした。桜ヶ丘公園に行けば拓斗と一人きりになつて話せるが、絶対に行かなかつた。ずっと拓斗から逃げている。そんな毎日はいつまでも続かず、拓斗が転校する日が近づいてきていた。

出発する前日の放課後、みんなは最後のあいさつをしたり手紙を渡していたりしたが、俺はすぐに帰つた。教室を出るとき一瞬だったが、拓斗の悲しそ

うな顔が見えた気がした。だが、俺は最後の最後まで、拓斗と顔を合わせはしなかった。

ある日の帰り、無意識に桜ヶ丘公園に来いた。いつものように桜の木の下に座る。その時、初めていつも隣にいたはずの人がいないと気づいた。今まで何もできなかった自分に腹が立った。そして、今さら後悔している自分にも腹が立った。そんなことをしているうちに、日は暮れた。でも、まだ帰らなかった。拓斗がいなくなった今、自分はどうかすればいいのか分からなくなっていた。

次の日、また桜ヶ丘公園に行った。今度は拓斗との思い出を、思い出して一年ほどしか一緒にいなかったが、その一年間の思い出はどれもかけがえのないものだった。それから拓斗について考えた。拓斗は今どこにいるのか、なぜ転校したのかも分からない。だから、拓斗と会うことはできない。

「拓斗は無視し続けた自分に対してどう思っているんだろうか？」

もしかしたら、怒っているかもしれない。それとも怒つてはいないかもしれない。分からなかった。だから、「俺はミナからいなくなつてはいけないのかもしれない。」と、思った。

俺は拓斗の居場所が分からない。でも、拓斗は俺がどこにいるのかが分かる。「俺がミナ待つていく。拓斗が来くれれば会えるんだ。」と。そうして俺は、どこか決めた。

高校は家から通えるところへ行くことにした。

そして、残りの中学校生活は普通に過して、学校帰りには必ず桜ヶ丘公園に上っていた。

中学三年の春。卒業式。

卒業式からの帰り、親には先に変えるように言つて、俺は公園に行った。公

園に入ると、いつものように木の下に座る。

「拓斗がいなくなつて一年か……」

かした時に上を見上げると、一年前と同じように桜はきれいに咲いていた。周りを見ても、何も変わつてはいなかった。いつの間にか、俺と拓斗だけ変わつていった。

この先、どれくらい一人で桜を見るのかは分からない。だが、俺は、いつまでもここにいて、この桜の木を見続けようと思い決めた。

完

② 駒とめて袖うちほらる陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮れ(藤原定家)

2002年11月27日。

僕の家では旅行の準備をしていた。

僕の家は3人家族で、毎年、年末年始には泊四日の家族旅行に行く家族行事があった。

今年も3人で相談して、北海道に行くことにした。

「明日から北海道旅行だよ。」

「北海道どこに行きたい？」

「北海道か。だったら旭川がいいんじゃないかな。せうかく冬の北海道に行くんだから、寒くてたくさん雪が見られるところのほうがいいんじゃない？」

「旭川は明日から5日間くらい、雪が降るみたいだよ。」

「お、雪降つてるのが見られる？」

「雪見女の初めて。楽しみ。」

「そういえば、家族みんなで雪を見たことはなかったよね。」

「じゃあ、旭川旅行決定！」

そして翌日。

「よし、じゃあ、出発するか。」

「準備できた？」

「準備できた？」

「出発！」

ブーン

車で静岡県を出発した。

「お父さん、旭川までどのくらいかかるの？」

「うん、どれくらい、調へてみよう。」

「へい、シリ。静岡県掛川市から北海道旭川市まで車とどれくらい時間が掛かるの？」

「シズオカケンカケガワシカラホソカイドワアサヒカワシマエクルマデーロシカン
25フンカリマス。」

「19時間25分もかかるから、ゆつくり2日かけて行こう」
それから数時間し、夕方。

宮城県仙台市で一泊するところになっていた。

宮城県で、みんなおいしい牛タン、笹かまぼろを食へ、デザートにずんだもちを食へた。

「明日はよいよ北海道だよ。」

「楽しみ！」

そして翌朝

「それじゃ、出発しようか。」

ブーン

家族はまた出発した。

それから数時間後。

車は北海道まで進んでいた。

「雪が見えてきたわね。」

「どうだ、雪は。」

「白いわね。」

「降りて、触ってみる？」

「うん。」
車を止めて雪と触れ合おうとした。

「冷たいね。」

「雪見れてよかったな。」

「うん！」

ブーン

3人はまた車を走らせた。

しかし、このあと天気が急変し吹雪になった。

旭川に近くに連れ、どんどん雪が強くなつていき、いつしかホワイトアウト状態になつてしまった。

どこかに止まることを考えたが周りに路肩はなく、停車するとはできなかった。

近くに民家もなく、車を停める手段はなかった。

さてどうしようか。そんな事を考えながら運転していると、ハンドルを取られた。

路面は圧雪アイスバーン状態だった。

「わー」
ドンドンドンドン

車は道のそばの草むらがあつたであろう場所に横転した。

気がついたのは横転してからしばらくしてからだった。

「お父さん、お母さん、大丈夫？」
二人は揃つて、「大丈夫だよ」と答えた。

「寒いよ。」
車はさっきの横転にちがつく、エンジンが故障してしまつていたのだ。

「ほら、お父さんとお母さんの上着を着なさい。」
「お父さん、お母さんはいいよ。」

「お父さんとお母さんはいいいよ。」
そして、僕はいつしか眠りについていた。
そして少ししてから目を覚ました。

「……」

「大丈夫？」

返事はなかつた。

「お父さん、お母さん」

完全に意識を失つてた。

僕は携帯で救急車を呼んだ。

ピーポーピーポー

救急車だ。

救急車が到着する頃には僕も意識が朦朧としていた

かすかに開く眼に差し込んでくる夕日は目に眩しかった。

すぐに3人は旭川市内の総合病院に救急搬送された。

しかし、お父さんもお母さんもう度と目を覚ますことはなかつた。

僕も、かなり症状が重たく、3、4日入院することになった。

僕は悔やんだ。なぜ、旭川に行くことと提案したのか。

しかし、何を言ってもお父さんもお母さんも生き返ることはない。

僕は悔やんだまま、静岡県の実家に戻った。

そして僕は大人になった。

僕は冬が来るたびにこの経験の思い出す。

しんと雪の降る夕暮れ。辺り一面に銀世界が広がっているあの情景。

家族3人を見た最初、最後の雪景色は僕の心に残り続けている。

完

七時間目には、これらの小説を含めた三本の小説を全体で読み、交流を行った。交流は、「その和歌のもつ世界観を表現した小説として、妥当かどうか」という視点で行った。以下は、掲載した小説に寄せられた感想、意見の一部である。

①二人の感情の変化と変わらない桜の景色が上手く表現されている。
・大意の「心の内はわかりませぬ」が小説の「拓斗が自分に対してどう思っ

ているんだろうか」といって重なる。

・待っていた側の視点から書いているような感じがした

・周りの情景が変わらないことと友達との別れをつなげたところがすごい。

②「雪の降る夕暮れ、辺り一面に銀世界」という文章から、和歌の内容をうまく小説の中に入れてすごいと思った。

・家族旅行で楽しそうな話だったのに、急に悲しい終わりになって少し驚いた。

・車を停める場所もないし、一面の雪や夕暮れという情景があったから、この和歌だとすくなくわかった。

・和歌を読んだときは悲しい話だと思わなかったけど、こんな風に想像を膨らませて小説を書くことができたんだと感心した。

三、成果と課題

①、②の小説及びその他の生徒作品の評価に関わって

①、②ともに、生徒からの感想にもあったようにそれぞれの和歌の中心となる「歌人の思い」が各小説のクライマックスの場面に表現されており、そういった意味では他の生徒の見本となる作品であった。特に①の作品については、二次次に「書くこと」の領域で学習した描写等にも細かな気遣いが見られ、学習内容を作品の中に表現しようという意欲が見られた。②については、作者は国語の学習を得意としない男子生徒であるが、表現等稚拙な部分もあり展開が多少わかりづらい部分もあるものの、終盤の描写などに時間をかけて練る姿も見られ、「歌人の思い」をいかに印象深く表現するか考えられた作品であった。

しかし、どちらの作品にも共通する難点が、モチーフに偏りすぎ、その和歌の背景にあるストーリーを踏まえる形とは程遠くなってしまうことである。こういった生徒は他にも多数存在した。式子内親王の「玉の緒よ……」の歌を選び、「禁断の恋」という点のみがクローズアップさ

れた小説を書く生徒や、小野小町の「思ひつゝ」の歌を選び、「夢にまで見るほどの恋心」を淡々と描く生徒など、「恋」をテーマとした歌を選んだ生徒にはそういった姿が多く見られた。一方で、防人の歌（防人に行くは誰が背と…）を選んだ生徒などは、その和歌の全体において表現されているストーリーや詠み手の心情などに沿った小説を書いていた。

このような状況を考慮すると、評価の観点や方法には難しさがあると感じた。選歌和歌によつてその世界観を表現する方法に幅ができるからだ。今回の実践のように、いくつかの和歌の中から自分の好きなものを選び、小説化する、という課題を設定するならば、完成した作品の評価項目を精査したり、ある程度選歌とことのできる和歌を絞ったりなど、評価が明確になる工夫が必要と感じた。

・実践を通しての成果と課題

現代の映像作品などといった身近なところにも伝統的な言語文化が活きていることに気付けたこと、そうした言語文化を活かした作品を自分なりに作る事ができたことは、生徒たちの「言語文化を継承・発展させる態度を育成する意味」は成果があったといえるだろう。生徒たちが端々しい感性を働かせて意欲的に活動に取り組み、表現方法に悩み推敲しながらも自分の作品を作り上げ、お互いの作品から新たな学びを得た姿からは、充実感と達成感が見て取れた。

しかしながら、上述の評価に関わる部分以外にも、授業の構成にいくつかの課題が残る。

まず、「古典を指導する」とことになっていたなかで、どうかという点についてである。今回は、和歌のモチーフを活かして現代の感覚に置き換えた小説を書くという活動を行ったが、これでは和歌の世界観つまり、歴史的背景（作者、状況、常識を小説という形で扱った）ににならないかということである。内容把握の段階で歴史的背景に留意して指導を行い、それを小説にも反

映させる必要があったのではないかと感じている。

次に、交流の場面をいかに設定するかという点についてである。今回の実践では、小説の設定をしたときと、実際に小説を書き上げたときの二回、生徒同士が作成したものについての交流を行ったが、設定の段階での交流内容は深まりがなく、意見交流も活発に行われなかった。反面、書きあがった小説についての交流では、時間が経っていることも関わらず、読み手の感想も和歌の内容をしつかりと押さえたものとなっており、議論も活発になされていた。このような実態を踏まえ、設定の交流は必要ないかもしれない。しかし、設定の交流があつたことで、小説の内容を考え直せよという生徒や、それまでも何もしなかつたが、友人の設定を参考にできたこと、生徒がいたことも事実であり、全く無くしてしまつと別の問題を生む可能性もある。したがつて、設定の内容や時間配分など、細かい部分での見直しなども含めて改善の余地があると考えられる。

おわりに

実験的な試みではあつたが、生徒たちの姿から様々な成果や課題が見られた。小中九年間のゴールである中学校三年生をどのような段階にするべく指導していくのが、そのために小学校低学年から中学校二年生までのような過程を踏むべきなのか、これらのことを常に念頭に置きたながら日々の実践を積み重ねていきたい。

注

¹ 文部科学省「中学校学習指導要領解説 国語編」(2017年6月) 9頁

² 第七十二回全国小学校国語科研究大会・釧路大会・研究紀要領域主題解説

くいにいさとし／浜中町立茶内中学校